

[025]九州人類学会報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2320119>

出版情報：九州人類学会報. 25, 1998-03-31. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

巻 頭 言

九州人類学研究会会長 清 水 展

日本民族学会と日本人類学会との共催による最後の連合大会（第50回）が、昨秋、佐賀医科大学で開催されました。そして、心機一転、文化人類学への傾斜をいっそう明確にした日本民族学会の研究大会（第32回）が5月23、24の両日に、九州大学・西南学院大学の共催により、西南学院大学を会場として開催されます。学会にとっての重要な転期を、九州を舞台として迎えたことは、そこに単なる偶然以上の意味を見い出したい誘惑に駆られます。あるいは、そのことの意義を新たに作り出してゆかなければならないと思います。

学会名称の変更という企ては、過半数の会員の賛同を得られずに頓挫してしまいました。しかし、文化をめぐる諸問題を研究する学として文化人類学を再想像／創造してゆこうとする動きは、今後ますます活発になってゆくと思います。

今日、グローバル化の急速な進行により、もはや文化を、閉じた均質なコミュニティに共有される、固有で純粋なものとしては捉えられなくなっています。それでは、文化とは何か、少なくとも文化人類学が研究の対象とする文化とは何かという肝腎の点については、必ずしも研究者のあいだで明確な意見の一致が見られるわけではありません。言いかえれば、文化の定義も、その研究のありかたも未確定で、あらゆる議論に開かれており、それゆえ様々な可能性を含んでいるのです。

さらには、社会学をはじめ、文学や歴史学などの人文系の諸学においても、文化の研究へと問題関心の力点が移りつつあります。文化は、もはや文化人類学だけの独占的な研究対象ではありません。逆に、文化人類学の方が、そうした文化を研究する諸学から、未開社会研究という誤解にもとづく矮小化や周辺化を受けかねない危機をはらんでいます。したがって、これからの文化人類学の発展のためには、そうした隣接諸学との積極的な交流と連携、あるいは競合が不可避となっています。

今回の研究大会では、このような問題意識から、九州大学の太田好信さんをオーガナイザーとして、「人類学と隣接領域の再組織化」というシンポジウムが開催されます。また、記念講演には、ワシントン大学のRichard Fox教授をお招きし、「翻訳という概念を再考する」というテーマで報告していただきます。

日本民族学会にとって、今年が転機であるのと同様に、九州人類学研究会にとっても、4月1日付けで会員の何人かに、勤務先等の変更が生じています。まず、研究会の中心的なメンバーでいらした波平恵美子さんが、九州芸術工科大学からお茶の水女子大学に転任されました。また、西南学院大学の聶莉莉さんが東京女子大学へ、熊本大学の櫻井哲男さんが阪南大学へ、九州共立大学の慶田勝彦さんが熊本大学へ転任されました。代わって、韓景旭さんが西南学院大学へ、浜本まり子さんが九州共立大学へ、そして関一敏さんと坂本一光さんが九州大学に着任されました。今まで、九州人類学研究会の事務局をお願いしていた加藤尚子さんが、九州大学から国際医療福祉大学へ転任されました。

皆様のご活躍と、本研究会のいっそうの発展を願いつつ。